

# 杉田玄白

石原純

青空文庫



## 江戸時代の医学

自然科学のいろいろな部門がすべてそうであつたように、医学もまた我が国でだんだんに発達して来たのは明治以後のことですが、しかしそうなるまでにはやはり江戸時代の終り頃に多くの蘭学者たちによつて西洋の医学がさかんに輸入されたことを見のがしてはならないのです。もちろんそれ以前にも我が国に医術というものが無かつたわけではないのですが、それらはただ個々の経験を集めたようなものであつて、まだ全く学問として系統立つてはいなかつたのでありましたし、またわれわれ人間のからだのなかのいろいろな器官がどんなものであり、どんな働きをしているかと云うようなことは、まるでわかつていなかったのですから、本当の意味での医学が発達するのには、どうしても西洋の医学を輸入する必要があつたのでした。ところでこれを実際に行つた人々のなかで、ここにお話ししようとする杉田玄白すぎたげんぱくやまた前野蘭化まえのらんかなどと云うのが特に名だかいのですが、それに続いてたくさんいの蘭学医が出たので、今日の人々はこれらの先覚者たちの並々ならぬ苦心とその功績とを忘れてはならないのでありましょう。

もつと  
尤も杉田玄白よりも少し以前に、京都に山脇東洋という名だかい医者がありました。その父の清水東軒しみずとうけんという人も同じく医者で、山脇玄修やまわきげんしゅうという人について医学を修めたのでしたが、後に東洋がその養子となつて山脇と名のつたのだということです。しかしこの医学というのはその頃古医方こいほうと云われていたもので、上に述べた西洋の医学とはちがつたものであつたのですが、山脇東洋は人体の本当の有様を知るのには、どうしてもこれを実際に解剖して真相を見きわめなくてはならないと感じ、久しい間それを念願していたのでした。

それでもこの頃は屍体しかたいの解剖などが嚴禁せられていたので、獺かわうそなどを用いてそれをしらべたりしていましたが、これでは人体のことはまだよくわかりません。そこで十五年の歳月を費して機会を待つているうちに、漸く寶曆ほうれき四年になつて死刑屍の解剖が許されることになり、その年の閏三月七日に行われた死刑者の屍しかばねを請うけてその解剖を実行したのでした。この時、山脇東洋と共に若狭の酒井侯の侍医であつた小杉玄適こすぎげんてきという人もそれを実見して、ここに始めて内臓の有様が明らかになつたということです。東洋はこの結果を記して、「臧志ぞうし」という一書にまとめました。今から見れば、それには幾らかの誤りもないではありませんが、しかしともかくもこれは我が国で人体内臓のことを記した最初の

書物として、重要な意味をもっているのです。

東洋と共に屍体解剖を実見した小杉玄適と同じく、杉田玄白もまた酒井侯の侍医であり、互いに親しい間柄であつたことは注目するに足りることがらで、そこで東洋の書物からも大きな刺戟しげきをうけて、後に玄白が同様にその実見を行ったことは、この時代の医学の上に重要な意味をもつ事からであつたと云いわなければなりません。

## 杉田玄白の生涯

杉田玄白は享保十八年、若狭酒井侯に仕えた父甫仙ほせんの江戸の邸内で生まれました。父も同じく医者でオランダの外科を学んで、かなり名いの聞こえた人でありました。玄白というのは通称ですが、名は翼あぎな、字は士鳳しほう、齋いさい又は九幸翁きゅうこうおうと号しました。

若年のうちに既に幕府の医官西玄哲にしげんてつの門に入つて外科を修め、また宮瀬龍門みやせりゅうもんという人から経史けいしを学び、すぐれた才能を示したのでした。その頃、京都で上に記しました山脇東洋や、そのほか吉益東洞よしますとうどうなどと云いう医家が名だかくなって全国に聞こえるようになったのでしたが、同藩の小杉玄適が東洋のもとで学んでから、江戸に来て盛んに古医方こいほう

ということを称えたので、それに刺戟せられて玄白も大いに医学を究めようとし、しかしそのためにはオランダの医学を知る必要があると感じて、そこで自分の親友前野良沢と共にオランダの医者バブルに就いて大いにその蘊奥を究めようとしたのでした。

そしてそれには訳官西幸作などにも近づいてオランダ語にも通じ、その上で十分にオランダ医学を修得して、その極めて精緻なのに感服したと云うことです。前野良沢と云うのは、やはり代々医者業とした家から人で、中津侯に仕えていましたが、良沢は幼時に孤児となつたので、山城淀藩の医者宮田氏に養われて育つたのでした。

玄白はともかくこのようにして良沢と共にオランダの医学に精通するようになってから、ドイツのクルムスの解剖図譜のオランダ訳書を藩侯から賜わつたので、それを詳しくしらべてゆくと、古くからの言い伝えとは大いに違つてゐるので、これを実際についてよく調べてみたいと思つていたのでしたが、偶々明和八年三月になつてこれを確かめる機会が与えられたのでした。

ちようどその三月四日の未明に江戸千住の小塚原で一人の婦人の刑屍体の解剖が行われることになつたので、玄白は前野良沢と共にそこに赴き、クルムスの解剖図譜と照らし合わせて見たところが、この図譜がいかに正確に実際と一致しているのに、今さらに驚

いたのでした。これはその後小塚原の腑分けふわけと言い伝えられた名だかい事実になっているのです。

ところで玄白と良沢とは、ここで西洋医学の正しいのに感服して、この書物を大いに世に広めることが大切であると考え、その翌日から良沢の邸に同志を会合し、良沢を盟主となし玄白のほかになお中川淳庵なかがわじゅんあん、桂川甫周かつらがわほしゅう、石川玄常いしかわげんじょう、およびその他の人々が相寄つてこの書の翻訳ほんやくに従事することとなり、その後四箇年を費し稿を改めること十回到り及んで、遂に安永三年八月に至つてその仕事を一先ひとまず完成しました。これが名だかい「解体新書」という書物で、四巻から成つていたので、我が国のその頃の医学に貢献したことは、実に多大であつたのでした。

玄白はその後も多くこととははじめの書物を著しましたが、そのなかには、「瘍家大成ようかたいせい」、「蘭学らんがく事始こととははじめ」、「形影夜話けいえいやわ」、「狂医之弁」、「医叟独語」、「外科備考」、「天津楼漫筆てんしんろうまんひつ」、「養生七不可ようじょうしちふか」などがあります。そして文化十四年四月十七日に八十五歳の高齡で病歿しました。玄白の功績を追賞せられて、明治四十年に正四位を追贈せられたことは、彼の一代の光栄と云うべきであります。玄白は晩年に一子を挙げ、立卿りゅうけいと名づけましたが、この立卿も、またその子の成卿せいけいも、同じく医家として世に聞こえていた人々であ

ります。かくて杉田一家の我が国の医学に貢献した事蹟<sup>じせき</sup>は決して尠<sup>すくな</sup>くはなかつたと言わなければなりませんまい。

## 解体新書

「解体新書」は、上にもお話ししましたように杉田玄白等の四年にわたる苦心の結果で出来あがつたものであり、その頃の我が国の医学に非常に役立った書物なのでありますが、この書をつくり上げるまでに玄白等がどれほど骨折ったかは、後に玄白が著した「蘭学事始」という書のなかに詳しく記してあります。「解体新書」の出来あがつたのは安永三年でありましたが、「蘭学事始」はそれから凡<sup>およ</sup>そ五十年を経て玄白の歿した文化十四年よりも三年程以前に玄白が書きのこしておいたもので、それも久しく世に知られなかつたのですが、明治維新の直前になって神田<sup>かんだ</sup>孝平<sup>たかひら</sup>および福沢<sup>ふくざ</sup>諭吉<sup>ゆきち</sup>によってふとそれが見つけ出されたので、それで玄白等の異常な苦心も明らかにされるようになったのは、まことにめずらしい事ながらもあると思われます。またその外に、玄白が建部<sup>たてべ</sup>清庵<sup>せいあん</sup>という人との間にとりかわした手簡文を集めた「和蘭<sup>おらん</sup>医事<sup>だいいしもん</sup>問答<sup>どう</sup>」や、随筆<sup>ずいひつ</sup>集<sup>しゅう</sup>たる「形影夜話」の

なかにも同様なことが記してあるので、ともかくも「解体新書」ができ上がるまでに彼が非常に大きな努力を費したことは確かであります。

「解体新書」はクルムスの原著の翻訳ほんやくにはちがいないのですが、そのほかにオランダの解剖書をたくさんに参照してその図を採ったり、またいろいろの説をも引用しているばかりでなく、東洋での古来の説をも時々まじえて、それに玄白の経験を基にした考えをも記しているのです、全体としては単なる翻訳ほんやく以上に出ているのでした。しかし玄白も漸次年ぜんじを経るに従って更に完全なものをつくり上げようと考え、この「解体新書」をもう一度改刻しようと思っていたのでしたが、老年になるに従って自分の手ではそれを果たすことが困難になって来たので、そこで門人の大槻玄沢おおつきげんたくに依頼いしよくしてこの仕事を行うことに決心したのでした。玄沢はそこでクルムスの原著を改めてよく調べたり、また書類を多く参照したりして、それに十年の歳月を費し、稿を改めること三回に及んで、文政九年に至り「重訂解体新書」なるものを完成したのでした。それには杉田玄白先生新訳、大槻玄沢先生重訂と記されていますが、玄沢がこれがために大いに苦心努力したのは言うまでもないのです。全体で十三巻から成り、最初の四巻は解体新書を重訂したものでありますが、そのほかのものは玄沢が、註釈ちゆうしやくとして附け加えたもので、そのなかにいろいろの大切な

事がらが記されているのでした。玄白はこの書の稿が成ったときに、それに次の文を寄せ  
ているのです。このなかに門人茂質しげかたとあるのは大槻玄沢の名であります。

「余初め斯この編を訳定する、今を距る殆ほとんど三十年、学問未だ熟せず、見識未だ定まらず、  
参攷書さんこうしょ無く、質問人に乏し。故に未だ其底蘊うんを罄きざる者鮮しと為さず、第人たをして医  
道の真面目を知らしめんと欲するに急にして、遽にわかに削きけつに附し、諸これを天下に公けに  
す。今自ら之を觀れば、慙ざん愧殊に甚だし。因つて校修を加へて以て改刻せんと欲するこ  
と一日に非ざるなり。独り奈何いかんせん、老衰日に逼せまり、志ありて未だ果さず、常に以て  
憾うらみとなす。乃すなわち門人茂質に命じて改訂に当らしむ。近ごろその草藁そうこうを持し來つて余  
に示す。余卷を開き、細玩するに、複する者は之これを芟かり、闕かく者は之これを補なまひ、譌なまる者は  
之これを正し、綜核究窮、直ちに原書の蘊うん奥おうを尽つくす。其紹述の功勤めたりと謂いふ可し。是  
に於てか余の喜び知る可きのみ。斯書一たび出ては則ち須らく以て善書と為すべし。旧  
本を取つて惑を生ずること勿なくんば幸甚。―

この文を読むと、玄白が自ら博識をもちながら、しかもいかに謙虚であり、それと共に  
門人玄沢に対していかに信賴の厚かったかを十分に覗うかがうことができるでありましょう。そ  
して実際に玄沢もまたその期待に背かず、よく玄白の遺業を完成したことは、当時にあつ

て特筆するに足りる事がらでもあったのでした。この玄沢は一関侯の藩医茂蕃の子として生まれたのですが、杉田玄白の名声を慕ってその門人となったので、後年には仙台侯の侍医となり、同じく名声の高くなった人です。

何れにしても、我が国の医学は山脇東洋に次いで、杉田玄白や前野良沢などによつて正しい道に進んだと云つてよいので、その後続々と多くの医学者の出て来たのも、専らこの人々の功績によるのであり、その意味で私たちはこれらの先覚者たちに多大の感謝をささげねばならないのであります。



# 青空文庫情報

底本：「偉い科学者」實業之日本社

1942（昭和17）年10月10日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

「併し」は「しかし」に、「及び」は「および」に、置き換えました。

※読みにくい言葉、読み誤りやすい言葉に振り仮名を付しました。底本には「第」、「諸れを」に振り仮名が付されています。

※国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/>) で公開されている当該書籍画像に基づいて、作業しました。

入力：高瀬竜一

校正・・sogo

2019年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 杉田玄白

## 石原純

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>